

「X線診断へのアプローチ5 腹部実質臓器—肝胆膵腎副腎他」

平松 京一 平松 慶博 著

奈良医科大学教授

打田日出夫

好評を得ているX線診断へのアプローチシリーズ第5巻「腹部実質臓器—肝胆膵腎副腎他」が、腹部血管撮影の大御所であられる平松京一先生と腹部単純X線とCT診断の大家である平松慶博先生、兄弟の共著により上梓されたことは誠にうれしいことである。本シリーズは画像診断のプロセスにおける単純X線写真の役割と重要性を理解させながら、確定診断に到達するまでのステップと思考過程のトレーニングを目的としたものである。

本書もこの方針を貫いて腹部単純X線診断のポイントと最終診断への過程が事例から解説されており、腹部単純像からどの程度の情報が得られ、これを正しく読影することが確定診断と次の診断法の選択にいかんにか大切であるかを教示している。超音波、CT、血管造影などの各種のmodalityが発達・普及した今日、腹部単純X線写真は診断的価値が低くなったように錯覚され軽視されるきらいがあるが、これは非常に誤った危険な考え方であり、腹単が確定診断や診断の手掛かりとして重大な役割を持つ場合があることを銘記しておくべきである。腹単は胸部や

骨に比べれば診断的置位づけが低いことがあるにしても、これを疎かにすることにより確定診断を遅らせたり誤った方向へ進んだりすることも少なくない。腹単は他の画像では得ることができない情報を提供し、1枚の写真で確定診断に結びつくこともあるし、診断を進めるうえでの指標として役立つことも多い。もちろん、疾患の種類と拡がりにより腹単の役割は異なり、各臓器内に限局する小病変の診断には無力であるが、異常ガスや石灰化像の発見、肝・腎・腰筋などの辺縁や側腹線などの異常を腹単からチェックすることは種々の疾患を診断するうえに非常に大切である。何といても1枚の単純X線写真で腹部全域の骨格、軽部陰影、ガス像、石灰化像などを同時に捉えることができる強みがあり、これらの異常を相互に関連させながら診断を進めることができる絶妙さがある。更に超音波やCTで得られた情報を腹部単純X線診断にフィードバックさせることにより、腹部単純写真の論理的読影による深さと妙味が倍加して一層理解しやすくなる。たとえば、flank stripe, hepatic angle, 腎や腰筋辺縁などの

明確な同定と、これらの不鮮明性の病態が従来よりも論理的に具象化されて理解できる。

本書では、腹部単純X線読影の基本となる5例を含めて、各種疾患50症例が呈示され、各症例ごとにまず腹部単純写真でどこまで診断できるかを、質問形式(Q₁, Q₂, Q₃.....)とあなたの診断?で始まり、解答を解説ではイラストを示しながらA₁, A₂, A₃.....と読影していき診断に到達する仕組みになっている。続いてノートの項では呈示症例に関連した知識を整理し、理解を深め確定診断に結びつくための超音波、CT、尿路造影や血管造影などが適切に示されている。いずれも非常に簡潔な解説で読者を退屈させずに学習できるように配慮されており、両先生のお得意とする持味を十分に生かすことにより、本書は一層完全な類をみない魅力あるものになっている。また、通常は細部までの描出が難しい腹部単純X線写真が他の画像と共に、非常に鮮明にわずかな濃淡までも忠実にプリントされており、画像診断書として理想の目標に達した最高級のものといえる。本書は学生と研修医にとっては腹部単純X線診断を主として腹部画像診断の習得に好適であり、また、臨床医には放射線科、内科、外科を問わず日常診療に即座に役立つハンディな腹部画像診断書として広く推薦したい。

B5判 254頁 図96 写真208 1986年
定価4,800円 送料300円

医学書院 刊